中世の城址

楢岡城と楢岡氏

中世の城址　楢岡城と楢岡氏

目　次

I 楢岡城跡の概要…… 1
（1）位置と立地
（2）楢岡城の縄張
楢岡城内縄張図…… 2-3
（3）楢岡城の始まりから廃城まで
（4）ほどこされた色々な防御施設 …… 4
楢岡城の見どころ…… 5
①　本丸裏の空堀跡
②　二の丸、三の丸間の切岸と空堀跡
II 中世秋田の諸勢力 …… 6
戸沢氏
小野寺氏
安東氏
六郷氏・本堂氏・由利衆など
中世の秋田地域の勢力図…… 8
III 楢岡氏 …… 9
（1）楢岡氏の前身、小笠原氏
楢岡城の始まり…… 10
（2）小笠原氏から楢岡氏へ
～　小笠原氏、楢岡城へ出陣　～
○小笠原　光冬（楢岡城主初代）
■楢岡城と共に歩んだ楢岡氏
▶楢岡　長倫（2代目）～楢岡　光芳（5代目）
▶楢岡　清長（6代目）…… 11
（1）戸沢氏の危機を二度も救った楢岡清長（6代目）… 11
①　忠盛事件
②　小野寺氏との抗争
（2）戦国期の楢岡氏　～　戦国争乱のとき　～ …… 12
▶楢岡　光兼（7代目）～楢岡　光清（8代目）
（3）豊臣秀吉～関ヶ原まで …… 13
①　いざ、小田原の戦い
②　それぞれの戦い　関ヶ原…… 14
■楢岡城の終幕…… 15
■年　表……16-17
小笠原氏家系図…… 18
楢岡城と近隣の館…… 19
菅江真澄が描いた楢岡城…… 20
周辺案内図／奥付

I 楢岡城跡の概要

（1）位置と立地

楢岡城は大仙市南外字古館山地内を中心とする中世の城跡で、JR奥羽本線神宮寺駅の西方4kmに位置します。

城跡は、旧南外村を北流して来た楢岡川と東に流れる雄物川の合流地点にある古舘山に築かれています。

（2）楢岡城の縄張

城が築かれた古舘山は、西側に連なる愛宕の峰から南東側に突き出た半島状となっており、丘陵からは、規模の大きな空堀で切り離されています。このため城跡は、東西250m、南北350mの規模で、周囲の平坦地よりも40m～50mほど高い平山城となっています。

中世の城（平山城・山城）は、敵から城を護るために、出来るだけ攻められにくい険しい地形のところ（要害）に築かれます。上から見た形が三角形に近い楢岡城も南側から東側は楢岡川に面し、北側は堤沢に、西側は常泉寺のある沢に面して急斜面となっています。楢岡城は、このような地形の山の頂部を削って平らにした面（曲輪）が多く造られており、そこには様々な建物や櫓などがあったと思われます。これらは本丸、二の丸、三の丸、馬場などと呼ばれています。（ただしこれは、当時からこのように言われていたかどうかは、確かめることができません。）

また、このように配置された曲輪も、敵から簡単に入られるようでは困るので、これを防ぐための様々な防御施設が築かれています。それが、用語解説にある切岸や土塁、空堀などです。

楢岡城内縄張図

※各場所の呼び名は史実には基づかない

（3）楢岡城の始まりから廃城まで

楢岡城がいつ頃、誰によって築かれ、何と呼ばれていた城跡であるかは、分かりません。ただ、江戸時代に書かれた記録によると、現在の横手市増田に居た小笠原氏が室町時代中頃の 1458 年（長禄２年）に、それまでこの城の主であった佐原氏（三浦氏）を攻めて陥落させ、移住して来たとあります。

この後、小笠原氏は新たに領主となった地名を名乗る（楢岡氏）ようになり、城も楢岡城と呼ばれたようです。

その後、楢岡氏は、現在の仙北地方で有力領主だった角館の戸沢氏の重臣の一人として生き、楢岡城は、1602 年（慶長７年）に戸沢氏が常陸（ひたち）松岡藩主になったのに伴って、最後の城主となった楢岡光清も移住したため廃城となったようです。

（4）ほどこされた色々な防御施設

平山城（ひらやまじろ）	山地と平地の両方の地勢を利用して築かれた城。楢岡城も愛宕山の一角、古舘山（標高65㍍）に築かれている。	虎口（こぐち）	城の出入口のこと。 城の内側と外側、曲輪等を結ぶ場所にあることが多い。 両脇を土塁や堀で固め、門戸を付けるなどして、敵の城内への侵攻を妨げるように造られる。
切岸（きりぎし）	敵が登れないように、曲輪の周囲の自然傾斜をほぼ断崖絶壁に近い状態まで人工的に削り取ったもの。 「掘」と同様、山城の最も基本的な防衛施設の一つである。 斜面を加工するだけで、防御力が上がり、伝承によると楢岡城では、これに加え「滑り」のある植物を植えていたと伝えられている。	曲輪・郭（くるわ）	山頂部などを削って平らに整地した区画で「掘」や「土塁」で区切り、構造や位置、使用する目的によって、本曲輪、二ノ曲輪、三ノ曲輪、内曲輪、外曲輪、横曲輪、引張曲輪、帯曲輪、腰曲輪など様々な呼び名がある。
空堀（からぼり）	敵の動きを妨害し、侵攻を防ぐための溝や堀。 山城においては、水を張らない「空堀」が主流で、堀の底を通路としても使用できる。 掘の断面の形によって薬研堀、箱堀などがあり、底面の形や掘の幅、深さなど状況に合わせて造ることが出来るため、有効な防御手段として、絶大な威力を発揮する。	土塁（どるい）	一般的には、土を盛り上げ、曲輪の周囲に壁を造り、敵の攻撃や侵入から城内を防御するものである。しかし自然の地形を活かしながら前後を削って土堤状に残した削り出し土塁などもある。 上から攻撃したり、敵の矢を防いだり、侵攻を防いだりする防御機能を兼ね備える。
堀切（ほりきり）	山城や平山城、特有の防御手段で、断ち切るようにした短い空堀。 尾根は侵入し易いため、連続性を無くす事で侵攻の妨害を図る役目となる。		

楢岡城の見どころ

1 本丸裏の空堀跡

城主が住んでいたであろう本丸の北側には幅 10m、高さ７～８ｍの空堀跡がある。楢岡城跡最大の空堀であり、重要な拠点であったことが伺える。

2 二の丸、三の丸間の切岸と空堀跡

二の丸、三の丸の間には幅 15m、深さ５～６ｍの空堀により二の丸、三の丸を切り離すことにより、敵の動きを限定させ、行動速度を遅らせるなど城内での防御を高めている。

II 中世秋田の諸勢力

戸沢氏

戸沢氏は桓武平氏の流れを組み、鎮守府将軍平貞盛（平将門の従兄弟）の末裔とされる。南北朝時代に南朝軍の主勢力であり、雫石城へ撤退して南朝軍の勢力回復を狙っていた。1468 年（応仁２年）に、もともと仙北地域を治めていた南部氏が小野寺氏との抗争に敗れ、仙北三郡から撤退した後、戸沢氏は北浦郡（現在の仙北郡）の統一に成功し、小野寺氏、さらには安東氏との抗争を開始する。戸沢氏は、小笠原氏を含む近隣豪族と婚姻関係を結ぶなど血縁関係を深め、安定した勢力に成長していった。戸沢盛安の時代には、山本郡の統一に成功し戸沢氏の最盛期を迎える。盛安は中央の動向にも絶えず注目し、豊臣秀吉の小田原征伐には東北地方の戦国大名の中ではいち早く参陣し、秀吉の賞賛を受けた。その後、戸沢政盛の時代には、関ヶ原の戦いで東軍に属し、最上氏と共に上杉氏と戦う。しかし上杉討伐で安東氏の勢力が増大することを恐れ、消極策に終始する。戦後、この行動が咎められて常陸国松岡（現在の茨城県高萩市）へ減転封される。小笠原氏は戸沢氏と共に北浦郡を去った。

小野寺氏

小野寺氏は藤原氏の末裔で下野国下都賀郡（栃木県栃木市）の出とされている。戦国時代に入り、小野寺輝道の時代には、横手城を本拠とし、雄勝郡をはじめ平鹿郡、山本郡から由利郡・河辺郡・最上郡にまで勢力を広げる有力大名となり、「雄勝屋形」と称されて、最盛期を迎えた。また輝道は上洛して織田信長と会見を願う親書を送るほどであった。しかし、輝道の後、小野寺家の家督を継いだ義道は北の安東氏や戸沢氏、南の最上氏の勢力拡大から、勢いに陰りが見え始め徐々に勢力を縮小せざるをえなくなった。最上氏や戸沢氏との抗争に敗れるなど、徐々に力を失い、関ヶ原の戦いで石田三成、上杉景勝らの西軍に味方したため、1601 年（慶長６年）には改易されたうえ、石見津和野（現在の島根県）に預けられた。ここに戦国大名として小野寺氏は滅ぶこととなった。

安東氏

安東氏は津軽地方の豪族の出とされている。鎌倉時代には津軽地方を本拠地に西は出羽国秋田郡（現在の秋田市と北秋田市一帯）から東は下北半島まで一族の所領が広がった。のちに二家に分裂し檜山郡（現在の山本郡）と秋田郡にそれぞれ割拠したが、1570 年（元亀元年）に安東愛季が両家を統合し安東氏の全盛期を築き上げた。愛季は上杉謙信、織田信長らと対等の親交を通じ冠位を持つほどであった。愛季没後、実季が後継者となり 1589 年（天正 17 年）以降は秋田氏を称したが、関ヶ原の戦い後、佐竹氏処分の余波を受け常陸国宍戸（現在の茨城県笠間市）に国替えとなった。

六郷氏・本堂氏・由利衆など

中世の秋田には、出羽国山本郡（現在の美郷町）を支配していた六郷氏や本堂氏、出羽国由利郡（現在の由利本荘市・にかほ市）の豪族集団である由利衆（由利十二頭とも呼ばれている）など、戸沢氏や小野寺氏、安東氏以外にも地域を治めた領主が存在し、お互いに主張する領地の境を牽制しあっていたと伝えられている。

── 中世の秋田地域の勢力図 ──

III 楢岡氏

楢岡城は、別名　南楢岡　揚土ノ城とも言い、古舘山に築かれ、東に雄物川を見渡し、南は楢岡川の清流に面した防衛拠点としての要害機能を兼ね備えた山城である。元来、楢岡地域は早くから林産及び窯業、製鉄・鋳造などの手工業生産による物資の交易が盛んであり、その地域である大友郷・楢岡郷を一括して支配し、河口を抑えるために築城されたとされている。また南外地域には館跡が 16 ヶ所あり、当時はこの地域に多くの豪族が居を構えていた。

室町時代、この地には佐原（三浦）時連の城があったと伝えられているが、1458 年（長禄 2 年）に小笠原氏により攻め込まれ、占領され廃城となるまで小笠原（楢岡）氏の居城となった。

（1）楢岡氏の前身、小笠原氏

小笠原氏（楢岡氏）の来歴は清和源氏の流れを組み、1372 年（応安 5 年）、室町幕府第 3 代将軍足利義満の命により、京都から淡路国（兵庫県の淡路島）に出兵し戦功を上げる。

1394 年（永享 2 年）、第 6 代将軍足利義教から松峰の城を賜り、信濃国筑摩郡に居住する。

小笠原氏長の長男である小笠原長棟の子、光冬は信州を去り、元々は小笠原家の一族である、奥州南部氏の領地に身を置いた。羽州仙北郡増田城主三浦義久を攻略して、その城に入り、近隣の諸将と辺境争いをし、武勇を轟かせた。

楢岡城の始まり

（２）小笠原氏から楢岡氏へ
～　小笠原氏、楢岡城へ出陣　～

○小笠原　光冬（楢岡城主初代）

1458 年（長禄２年）、増田城主であった小笠原光冬が兵を率いて楢岡城主（別称揚土ノ城）佐原氏の治める楢岡の地に攻め入り、翌 1459 年（長禄３年）に増田城から楢岡城に移ることとなる。その後、小笠原光冬は、角館城主　戸沢家盛と親交を結んだ。これは増田城を小野寺氏によって奪われたため、それに対抗する戸沢氏と親族関係となることで、仙北の野に一大勢力を広げることが目的であったと推測される。この婚姻政策は、戸沢氏と小笠原氏との間で幾度も行われ、強固な関係を築いていくこととなる。また、この頃から地名である楢岡の姓を名乗りだしたと伝えられる。

このように中世を生き抜いてきた楢岡氏にはたくさんの逸話（エピソード）が残されており、その中のいくつかを見てみよう。

■楢岡城と共に歩んだ楢岡氏

▶楢岡　長倫（２代目）～楢岡　光芳（５代目）

光冬の死後、嫡子小笠原（楢岡）長倫（２代）が相続するが、男子が無く、娘婿に戸沢寿盛の三男長峰（光遠）を養子に迎え、家督を継がせる。その後、楢岡長峰（３代目）、楢岡光政（４代目）、楢岡光芳（５代目）の順に城主を務めることとなる。

▶楢岡　清長（６代目）

（１）戸沢氏の危機を二度も救った楢岡清長（６代目）

①　忠盛事件

光芳の子楢岡清長（６代目）は、角館城主戸沢秀盛に二女を嫁がせ、戸沢道盛が誕生する。道盛は、後の智勇に優れ、周辺の諸大名から「鬼九郎」「夜叉九郎」と呼ばれ、恐れられた戸沢盛安の父である。

秀盛は、1529 年（享禄２年）にこの世を去り、わずか６歳の若さで道盛が家督を継ぐ事となったが、秀盛の弟で伯父の羽州北淀川城主戸沢忠盛は、幼少の道盛を桜田（旧千畑村土崎）へ追い出し、角館城へ入った。いわゆる「忠盛事件」である。

この話を聞いた清長は、娘と孫を守るため、家臣を従えて出向き、永山氏、長野氏、小山田氏等の戸沢家代々の諸将を集め、忠盛に従わないように説得した。この策略により身辺の危機を感じた忠盛は、1532 年に角館城から淀川城へ逃げ帰ったため、戸沢氏は危機を脱した。

②　小野寺氏との抗争

1541 年（天文 10 年）、横手盆地中央部に進出してきた小野寺輝道が大軍を率いて、角館城に押し寄せた。

これまで、戸沢家につき従ってきた仙北の諸豪も小野寺氏の勢威に圧倒され、援軍を出せず、角館開城の危機にあった。

そんな折、道盛の母（清長の娘で秀盛の後室）は、戸沢家臣を城内に集め、家臣らを奮起させ、小野寺軍と決戦に挑んで交戦していたが、状況は不利なままであった。

その頃、外戚である楢岡清長は、角館城に援軍を送りたかったが、檜山城安東愛季と交戦中であったため、南部高信に使いを送り、南部氏の大軍で安藤氏との辺境を攻撃するよう一計を講じた。

この策略により、安東氏が南部氏の大軍に対抗するため、鹿角に兵を向けると清長はすぐさま六郷政英（六郷城の六郷氏）、本堂親房（千屋城の本堂氏）を説得し、連合軍として角館城を救済するため、小野寺軍の背後に迫った。

この事により、小野寺輝道は、やむなく兵を退かせることとなった。このように清長は策謀と武勇により、戸沢家の２回の危機を救った立役者として、功績を語り継がれることとなる。

（2）戦国期の楢岡氏　～　戦国争乱のとき　～

▶楢岡　光兼（7代目）～楢岡　光清（8代目）

戸沢道盛は、楢岡清長の外孫にあたる。

道盛は、六郷氏と楢岡氏の両家の和談を提案し、六郷政乗の息女と光兼の舎弟である光清が婚姻し、六郷氏、楢岡氏の両家は親密な関係となる。

1575年（天正3年）、に22歳で光兼がこの世を去り、光兼に継ぐ男子がいなかったため、光兼の弟で吉高の楢岡光清（8代目）が家督を継いだ。

光清は、楢岡城に移り楢岡右エ門尉と称した。

1579年（天正7年）に光清は、安東実季の領地の豊島に攻め入り、1584年（天正12年）には、戸沢盛安に援軍を願い、小野寺輝道の領地である沼館大築地に出陣する。

この戦はのちに「阿気野の戦い」と呼ばれ、各地の戦場でも目覚ましく奮戦した戸沢盛安はのちに「鬼九郎」、「夜叉九郎」と呼ばれるようになった。

1587年（天正15年）、戸沢盛安と安東実季の「唐松野の戦い」では、光清が500人余りの兵を引き連れ、淀川を下って出陣し、戸沢氏に加勢し勝利した。

これにより、安東氏の仙北進出の野望は打ち砕かれ、戸沢氏の実力を出羽諸豪に認識させる勝利となった。

1588年（天正16年）の夏、安東氏、戸沢氏、小野寺氏が檜山で戦った際には、戸沢氏に加勢して宮崎に出陣し武功を上げる。

光清は、戸沢氏に加勢し、各地で参戦していたが、豊臣秀吉より大名同士の争いを止めさせる私戦禁止の「惣無事令」が発せられた。羽州の諸大将は豊臣秀吉の威勢を恐れ、安東氏、戸沢氏、小野寺氏、六郷氏、本堂氏、仁賀保氏、由利氏らが和議を結んだ。

（3）豊臣秀吉～関ヶ原まで

①　いざ、小田原の戦い

1590年（天正18年）に豊臣秀吉は、小田原（神奈川県）の北条氏を征伐するために大坂から小田原に出陣する。東北の諸大将も豊臣秀吉の意向に従い、静かに兵を動かしていた。

光清は、不幸にも楢岡城で病床に臥しており、家臣宮川佐渡守を使者として小田原に向かわせた。

この時、角館城主戸沢盛安も小勢を率いて、密かに角館を出発し、小田原に赴いたが、不幸にも6月16日、享年25歳で病死した。

この年、光清の女子、時に15歳を戸沢盛安の弟である光盛に嫁ぐ。

この豊臣秀吉による「小田原征伐」後に実施された「奥州仕置」（※）で戸沢氏は、領内の35城の廃城を命じられたが、楢岡城は存続することとなる。

※「奥州仕置」…小田原攻めの後に秀吉が行った、東北地方の大名に対する領土の再配置。改易や減封などの処分を小田原攻めの際の功績から決めた。これにより秀吉が天下統一を果たしたとされる。

②　それぞれの戦い　関ヶ原

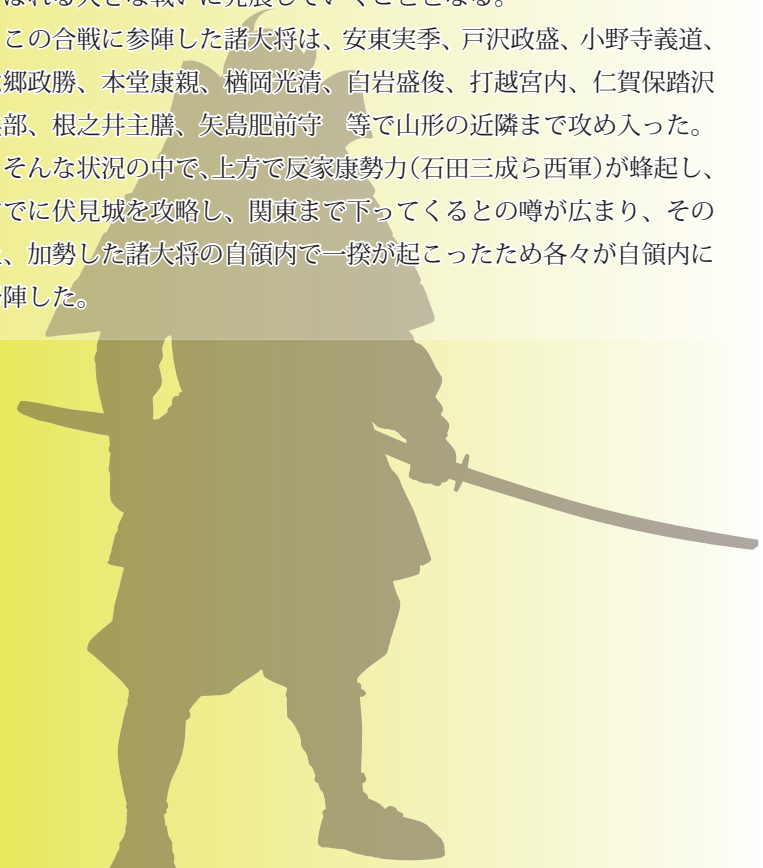
1600 年（慶長 5 年）石田三成が徳川家康を排除しようと企て、これに呼応し、奥州会津城主上杉景勝も奥州で兵を起こした。後に、上杉征伐、会津攻めとも称され、この会津征伐が関ヶ原の戦いの幕開けとなった。

これにより、徳川家康は景勝討伐のため兵を会津へ進軍させたが、三成らの挙兵を知った家康は直ちに会津征伐を中止し、野州小山で今後の対応を協議する。

家康は東北の諸大将に使者を使わし、最上義光に加勢させた。これが後の「慶長出羽合戦」の発端の事件となり、「東の関ヶ原」と呼ばれる大きな戦いに発展していくこととなる。

この合戦に参陣した諸大将は、安東実季、戸沢政盛、小野寺義道、六郷政勝、本堂康親、楢岡光清、白岩盛俊、打越宮内、仁賀保踏沢兵部、根之井主膳、矢島肥前守　等で山形の近隣まで攻め入った。

そんな状況の中で、上方で反家康勢力（石田三成ら西軍）が蜂起し、すでに伏見城を攻略し、関東まで下ってくるとの噂が広まり、その上、加勢した諸大将の自領内で一揆が起こったため各々が自領内に帰陣した。



■楢岡城の終幕

1601 年（慶長 6 年）の秋、東西の戦が終結し、天下統一に治まる。徳川家康は、この戦いの勝利に貢献した諸将には、賞を与え、そうでない諸将や西軍に組みした諸将などは領地の没収、改易、減封などの論功行賞を実施した。

その中で、楢岡光清は、中立を保って領内の城に留まっていたことから改易され、浪客の身となった。

戸沢政盛は、自身の母が光清の子であったため、光清を自身の下へ呼び寄せた。

1602 年（慶長 7 年）、戸沢政盛は、関ヶ原の戦いの功績により、本領の角館から常州多賀郡松岡（現在の茨城県）に転封となり、領地 4 万石を与えられ、常陸松岡藩主になった。

光清もこの時、戸沢家と一緒に松岡の郷に移り、この際に楢岡城は棄却されたと伝えられている。その後戸沢政盛は、山形藩主であった最上義俊が家中騒動を理由に改易されたことを受けて出羽新庄藩の初代藩主となる。

光清は、後に奥州南部に移り、南部氏の客礼として扱われ、1604 年（慶長 9 年）5 月 3 日にこの世を去った。

こうして、楢岡城は、1458 年（長禄 2 年）から 1602 年（慶長 7 年）までの約 144 年間にわたり存在し、乱世を見続けた一つの城として幕を閉じる。

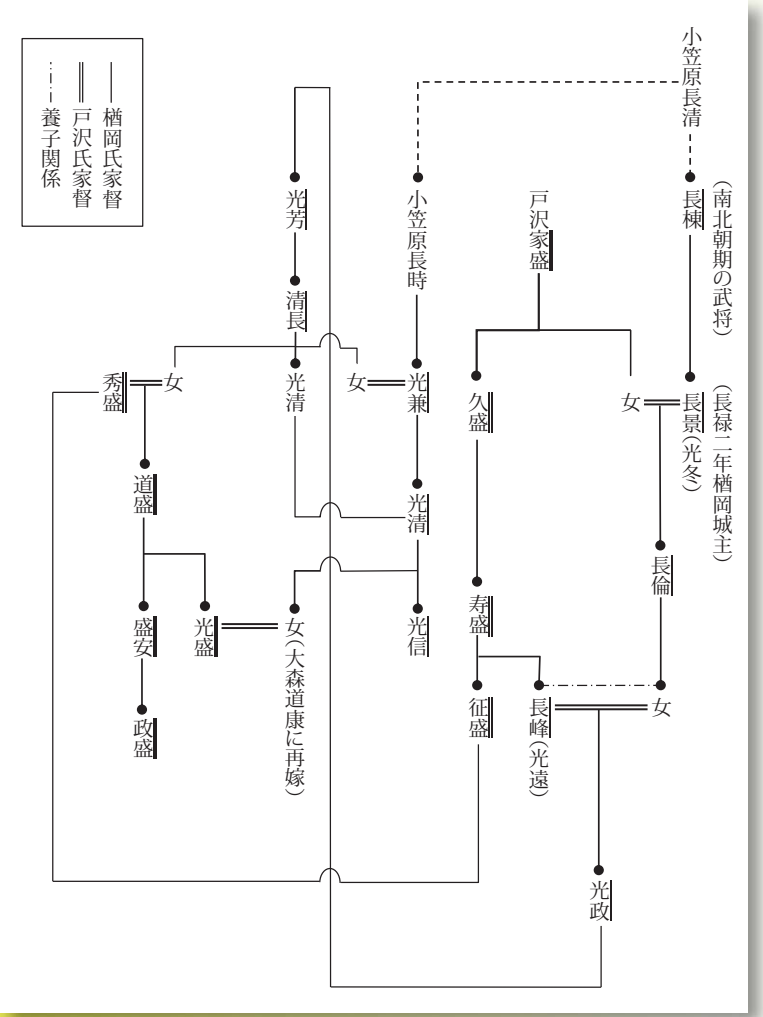
現在の楢岡城跡遠景

■年　表

※赤字は楢岡氏に関わる出来事

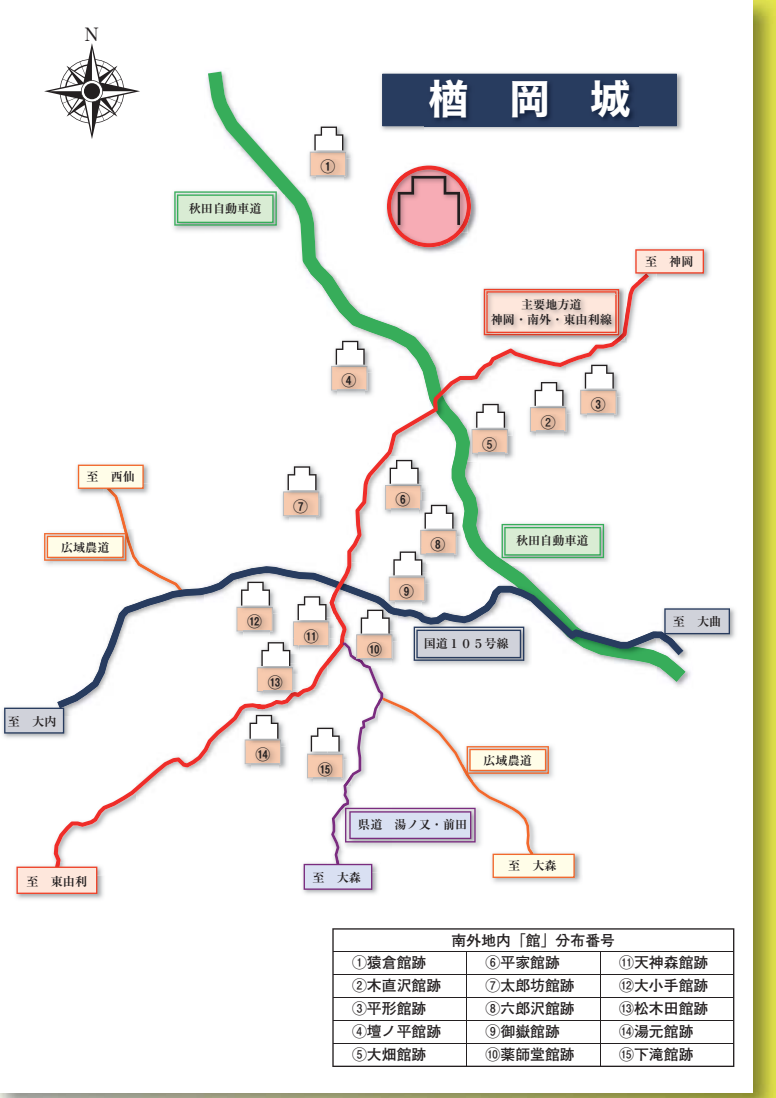
室　町　時　代	
1334	建武の新政
1336	建武式目制定
1336	南北朝時代へ（後醍醐天皇吉野へ→南朝）
1338	足利尊氏、征夷大将軍に就任
1368	足利義満、征夷大将軍に就任
1372	**小笠原氏直、京都から淡路国に出兵し戦功を上げる**
1378	足利義満、花の御所を造営（室町へ移る）
1392	足利義満、南北朝合一
1394	**小笠原氏直、信濃国筑摩郡に居住する**
1397	足利義満、鹿苑寺金閣造営＊北山文化
1404	勘合貿易開始
1428	正長の土一揆
1429	琉球王朝成立（中山 尚巴志が統一）
1458	**小笠原光冬、楢岡城に攻め入る**
1459	**小笠原光冬、増田城から楢岡城に移る**
1467	応仁の乱がはじまる（～ 1477）
1485	山城の国一揆
1488	加賀の一向一揆
1489	足利義政、慈照寺銀閣造営＊東山文化
1529	**戸沢忠盛、幼少の道盛を角館城から追い出す（忠盛事件）**
1532	**戸沢忠盛、角館城から淀川城へ逃げ帰る**
1542	**小野寺輝道、大軍を率い角館城に押し寄せる**
1543	鉄砲伝来
1543	**椎名秀忠、楢岡城へ攻め入る**
1549	キリスト教伝来
1553	川中島の戦い（上杉謙信×武田信玄 1 回目）
1560	桶狭間の戦い（今川義元を破る）
1568	足利義昭を奉じて入京
1570	姉川の戦い（浅井長政，朝倉義景を破る） 石山合戦がはじまる（～ 1580）
1571	比叡山焼打ち
1573	義昭追放→室町幕府の滅亡
1573	**六郷政乗、楢岡光兼の領地に攻め入る**
安土桃山時代	
1575	長篠の戦い（家康と組み武田勝頼を破る）
1576	安土城築城（翌年安土で楽市）
1580	石山合戦が終わる（蓮如と和解）
1582	本能寺の変（明智光秀が攻める　信長自害）
1582	山崎の戦い（明智光秀を破る）
1582	太閤検地
1583	賤ヶ岳の戦い（柴田勝家を破る） 大阪城築城（石山本願寺跡）
1584	小牧・長久手の戦い（徳川家康・織田信雄と和睦）
1584	**戸沢盛安、沼館に出陣し目覚ましい活躍をみせる（阿気野の戦い）**
1585	関白就任
1585	四国平定（長宗我部元親を破る）
1586	太政大臣就任（豊臣姓を賜る）
1587	九州平定（島津義久を破る）
1587	**唐松野の戦いで戸沢盛安が安藤実季に勝利する（楢岡光清、戸沢氏に加勢する）**
1587	バテレン追放令を出す
1588	**安東氏、戸沢氏、小野寺氏が檜山で戦う**
1588	刀狩令を出す
1590	小田原攻め（北条氏を滅ぼす）奥州平定（伊達政宗が服従） 全国統一
1590	**戸沢盛安、小田原に赴く途中で病死** **戸沢氏、秀吉により領内 35 城の廃城を命ぜられる**
1592	文禄の役　朱印船を明に派遣
1592	**楢岡光清、朝鮮征伐へ向け兵を率い大阪に至る**
1594	伏見城を築城
1597	慶長の役
1598	豊臣秀吉死去
1600	関が原の戦い
1601	**楢岡光清、関ヶ原の戦いで中立を守ったため楢岡城附 4 万国を改易され、流浪の身となる（後に戸沢氏へ）**
江　戸　時　代	
1602	**戸沢政盛、角館から常州多賀郡松岡に転封され常陸松岡藩主となり、楢岡城が棄却される**
1603	徳川家康、征夷大将軍に就任
1605	徳川秀忠、征夷大将軍に就任
1612	キリスト教禁教令（直轄領）
1613	キリスト教禁教令（全国）
1614	方広寺鐘銘事件
1614	大阪　冬の陣
1615	大阪　夏の陣
1615	武家諸法度制定 、禁中並公家諸法度制定
1616	徳川家康　死去

小笠原氏家系図



※「楢岡氏系図」「戸沢家譜」により作成

楢岡城と近隣の館



南外地内「館」分布番号		
①猿倉館跡	⑥平家館跡	⑪天神森館跡
②木直沢館跡	⑦太郎坊館跡	⑫大小手館跡
③平形館跡	⑧六郎沢館跡	⑬松木田館跡
④壇ノ平館跡	⑨御嶽館跡	⑭湯元館跡
⑤大畑館跡	⑩薬師堂館跡	⑮下滝館跡

菅江真澄が描いた楢岡城

月の出羽路仙北郡（つき　いでわじせんぼくぐん）　四（秋田県立博物館蔵：写本）

甲　愛宕の峰　乙　楢岡左衛門の古柵　丙　常泉寺
丁　上ケ土邑　戊　竹原ノ古四王ノ杜　己　八沢木川橋ありて上土邑に通ふ。楢岡左ヱ門尉氏郷の古柵を揚土ノ城といふ。其世は五千八百石を領し、慶長七年御遷邦の後は最上郡新庄にいたり、二千石を賜り、ゆゑありて今は八百石にて楢岡兵右ヱ門とて其末なほありといへり。（以上現代かな訳）

江戸時代に数々の記録を残した、菅江真澄（1754 年～ 1829 年）が記した「月の出羽路　仙北郡」に描かれた楢岡城跡。
この時代には楢岡城跡のある古館山に木がない状態であったことがわかる。

周辺案内図

アクセス

●JRをご利用…
東京駅▶大曲駅
秋田新幹線「こまち」利用
（最速3時間11分）
秋田駅▶大曲駅
秋田新幹線「こまち」利用（35分）
大曲バスターミナルより
（バスターミナルは大曲駅より徒歩約5分）
▶ふるさと館前下車
（岩倉温泉行き・約40分）

●飛行機をご利用…
秋田空港▶秋田自動車道
▶大曲 I.C▶国道105号
▶南外（30分）
秋田空港▶国道13号
▶南外（50分）

発行／大仙市南外地域協議会
協力／大仙市
出典／南外村史

問い合わせ／秋田県大仙市役所　南外支所
〒 019-1902　大仙市南外字下袋 218 番地
TEL.0187-74-2111

※このガイドブックは市の地域枠予算を活用しています。